

Aaを含めいずれも瓦範がシャープである。

2:軒平瓦は重弧紋と6647型式で、6641型式がない。

3:本屋根用と裳階用の瓦がある。

4:造瓦組織が左右に区別されていた可能性を示唆する「右」の刻印がある。

昨年度の参道の調査(1994-1次調査『藤原概報26』)で、金堂所用の本屋根用軒瓦を6121A-6647Gと推測したが、SX410出土瓦はそれを証明する。創建金堂の軒先はこのセットと、6121Ba・Bb-6647Cb・Ccで飾ることが企画され、瓦が調達されたことは間違いない。

裳階用軒瓦(6276E-6647I)は出土しなかったが、裳階用の丸瓦と平瓦が出土した。しかも、それらは本屋根用の瓦と同じ技法で製作されている。これは金堂の裳階が当初から計画・造作されたことを物語る。

平瓦に「右」の刻印が1点ある。これまで出土した「左」・「右」の刻印をもつ平瓦を再度検討したところ、これらはすべて捺りの細いタテ繩叩きだった。つまり、「左」・「右」の刻印平瓦は金堂所用に限定できる蓋然性が高い。左右が製作組織の別を示す考古資料には、奈良時代後半の木造百万塔がある。本薬師寺金堂の造瓦組織も同様の構成をとっていた可能性がある。

次に、1995-1次調査で出土した瓦について問題を整理する。この調査で出土した西塔の軒瓦は新旧二つの様相が混在する。古い様相を示すのは6276Aa-6641Hと6276E(薄型)-6641Kで、これは東塔と共通する。新しい様相は6276Ab・Ac-6641Oと6276E(厚型)-6641Iの2組。6276Aの彫り直しによって前後関係は明らかだ。後者では裳階用のセットは平城薬師寺と同じだが、本屋根用のセット6276Ac-6641Oは平城薬師寺からは出土していない。

西塔は基壇土から金堂所用軒平瓦6647Ccが出土したので、基壇築成は金堂完成を遡らない。所用軒瓦から西塔の創建時期について、次のような仮説を提示できる。

1:東塔とほぼ同じ時期に、6276Aa-6641Hと6276E(薄型)-6641Kで創建。6276Ab・Ac-6641Oと6276E(厚型)-6641Iで大規模な葺き替えが行われた。

2:創建時期は、6276Ab・Ac-6641Oと6276E(厚型)-6641Iの時期。これに6276Aa-6641Hと6276E(薄型)-6641Kのストック分を加えて屋根を葺いた。要は、新旧いずれのセットを主体とみるかだ。

1の場合、東塔にはそのような状況がないので西塔は建立後に大規模な修理が必要とされたか、あるいは移築に伴う再建の可能性も考慮の余地をもってくる。ただし、解体・再建を示す足場穴は検出されていない。

2の場合は、西塔の建立がほかの堂塔に比べてかなり遅れる。6641G・H・Oの3種は、H→G→Oの順に製作された。Hは紋様が最も整齊で、東塔や中門・回廊の創建軒平瓦。GとOとの紋様の系譜関係は先に述べた。6641Gには6276Aa・Abが、6641Oには6276Ab・Acが組む。本薬師寺では、6641Gはごく少量しか出土しないが、逆に6276Ac-6641Oは平城薬師寺からは出土しない。さらに裳階用軒平瓦6641Iは平城薬師寺創建瓦の一つ。しかも、西塔出土6641Iにはかなり範傷があるから、平城薬師寺の造営が一段落してからこれらの瓦が本薬師寺に供給されたとみてよい。とすると、西塔の瓦の製作供給時期は奈良時代に降り、『続日本紀』文武2年(698)10月4日条の「薬師寺の構作ほぼおわる」の時点で、西塔は建ち上がっていなかった蓋然性が高くなる。その場合、完成直前に焼け落ちた大官大寺の伽藍配置との関連が問題となろう。

(花谷 浩/考古第1)

## コラム: あ す か ふ じ わ ら ②

### ◆60年前の本薬師寺西塔跡

金堂土壇から西塔跡を望んだ写真。周囲は一面の田園地帯。背後の山は、畠傍山。本薬師寺や藤原宮の調査研究に大きな足跡を残した足立康『薬師寺伽藍の研究』(日本古文化研究所報告 第五 1937年)から転載。西塔跡は1996年に初めて発掘調査の手が加わった。橿原市城殿町所在。24頁参照。(C)

